

**<講演抄録>21. ハムスター口腔癌形成過程における免疫組織学的研究：第3報DMBA塗布とBrdUの取り込みについて(東日本学園大学歯学会第5回学術大会(昭和61年度総会))**

著者名(日)	吉川 泰子, 八重樫 和秀, 大内 知之, 菅野 秀俊, 阿部 英二, 中出 修, 賀来 亨, 奥山 富三
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	6
号	1
ページ	82
発行年	1987-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00007295/">http://id.nii.ac.jp/1145/00007295/</a>

## 21. ハムスター口腔癌形成過程における免疫組織学的研究 第3報 DMBA 塗布と BrdU の取り込みについて

吉川泰子, 八重樫和秀, 大内知之  
菅野秀俊, 阿部英二, 中出 修  
賀来 亨, 奥山富三  
(口腔病理)

従来, 種々の組織の細胞動態の解析には, DNA の中に取り込まれるトリチウム-*thymidine* のオートラジオグラフィが使用されてきた。最近, *thymidine* の analogue である 5-*bromodeoxyuridine* (以下 BrdU と略します) を結合した増殖細胞を BrdU モノクローナル抗体による免疫組織化学的方法によって見出すことができるようになった。すなわち, BrdU は特異的に DNA と結合することができ, 動物を BrdU で pulse label することにより, DNA を合成している細胞, cell cycle の S 期の細胞の DNA に BrdU は結合すると考えられている。

抗 BrdU 抗体は pulse label 時に, DNA を合成している細胞を区別するのに非常に有効である。

今回, われわれは 9,10-dimethyl-1,2-benzanthracene (以下 DMBA と略します) 塗布による頬

嚢粘膜癌形成過程における上皮性変化における BrdU の取り込みについて検討した。すなわち, DMBA 塗布と BrdU のパルス・ラベルの回数および BrdU ラベル後の経時的变化について検討した。

### まとめ

1. DMBA 無塗布群に比し, DMBA 塗布群では, BrdU でラベルされた核の著しい増加が認められる。
2. DMBA 無塗布, 塗布群の BrdU 投与1時間, 1週間後でラベルされた核の数に変化がなく, ほぼ同数であった。
3. 扁平上皮癌症例では BrdU 1回投与でも著しくラベルされた核が認められ, 1週間後では著しく BrdU でラベルされた細胞核の減少が認められ, 細胞増殖の活発なことを示している。

## 22. 骨形成性エプーリスの4例

大内知之, 八重樫和秀, 吉川泰子  
菅野秀俊, 阿部英二, 中出 修  
賀来 亨, 奥山富三, 九津見雅之\*  
(口腔病理, 口腔外科II\*)

エプーリスは一般に歯肉部に生じた良性で限局性の腫瘤を総括した臨床診断名として広く用いられ, 一般臨床においてもしばしば遭遇する疾患とされており, 多くは炎症性ないしは反応性の増殖物であります。病理組織学においては今日に至るまでに, 正木, 伊藤, 山村ら, 石川・秋吉ら, その他, 都築, 岩崎, 好士らによって各種の分類が試みられているが, エプーリスを単に炎症等に基づいた反応性の組織増殖物と扱うか, 真の腫瘍もその範疇に含むものとして扱うかで, 分類の仕方も変わってきますが, 腫瘍の線維組織中に硬組織の形成が明らかかなものは, 骨形成性エプーリスと呼ばれその発生頻度は比較的少ないものとされています。

我々はこれまでに4例の骨形成性エプーリスを経験したので, その概要と共にその他, 過去に報告されている約30症例についての文献的考察を加えた。

経験した4例は, 男性・女性それぞれ2例ずつで, 上顎臼歯部1例, 下顎前歯部1例, 下顎臼歯部2例で, 大きさは小豆頭大から拇指頭大までのもので, 自覚してから来院するまでの期間は様々であった。病理組織学的には, 骨形成性のエプーリスの中でも線維性エプーリスの化生によって骨組織が形成されたものである, 石川・秋吉らの分類によるところの骨線維性エプーリスと診断しました。

また, 文献的によれば骨形成性エプーリスは全エプー